ハンドボール競技におけるペナルティースローのキーピングに関する動感志向構造分析

－阻止率の高いゴールキーパーを例証にして－

中村千穂　（筑波大学）

１．目的

本研究では大学トップレベルのハンドボールのゴールキーパー（以下、キーパー）を研究対象者として、そのペナルティースローにおけるキーピングの動感志向性の特徴を明らかにすることを目的とする。それにより、今後のハンドボールにおけるキーパーの指導方法論に寄与することが企図されている。

２．研究方法

１）対象者:ペナルティースロー阻止率の高い学生キーパーであるＴ選手

２）分析方法：借問分析（金子, 2002）

３）借問の実施日と所要時間

１回目：2019 年 11 月 14 日(木)，30 分間

２回目：2019 年 11 月 18 日(月)，20 分間

４）分析手順

借問は、以下の順番で進められた。

①キーパーである筆者の動感志向性の分析

②Ｔ選手の動きの印象分析（マイネル, 1981）

③上記の分析を踏まえた借問項目の検討

④試合映像を見ながらのＴ選手への借問

⑤借問内容のテープリライト

⑥Ｔ選手の動感志向性の特徴の分析

３．結果と考察

借問分析により、ペナルティースローを阻止する上で重要と思われる３つの点が明らかになった。

１点目は、相手シューターの傾向を把握するためのスカウティングである。Ｔ選手は直近の試合や直接対決の情報から、相手の得意コースやキーパーとの対峙の仕方を分析、把握していた。

２点目は、ペナルティースローを阻止するためのプランの立案である。Ｔ選手は自分がどう動き、相手にどう打たせるのかを、具体的なプランを立てて、試合前やその最中に何度もイメージしていた。

３点目は、上記のプランを実現するためのフェイクや位置取りなど、具体的な動きかたを想定しているということであった。

なお、これら３つの点は、図１に示すような階層構造をなしていると考えられる。キーパーが具体的にどう動くのかを考える上で、相手シューターの傾向を把握するスカウティングが大前提となるのは言うまでもない（最下層）。その上で、自分が相手に対して優位に立つための具体的なプランの立案が可能となる（中間層）。そしてそのような明確なプランがあってはじめて、フェイクや位置取りなど、具体的な動きかたの想定ができることになる（最上層）。

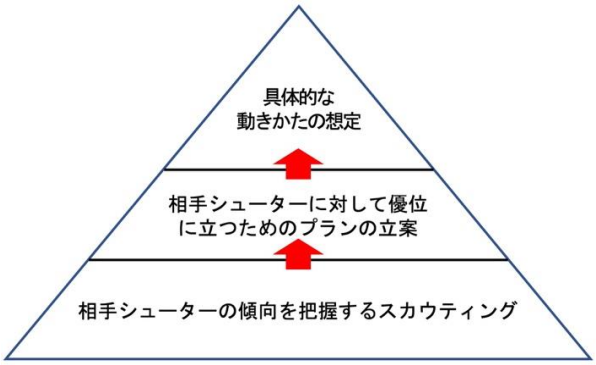

図１　ペナルティースロー阻止に関する動感の階層構造

４．結論

本研究では、ペナルティースローの阻止率の高いキーパーの動感志向性の特徴を明らかにしてきた。その結果、それを阻止する上で重要となる動感志向性のポイントとその階層性を解明することができた。

本研究が今後のハンドボールのキーパーの指導方法論の発展に寄与することを願い論を閉じる。

５．主な参考文献

マイネル, K.（1981）スポーツ運動学. 大修館書店, p. 452.

金子明友（2002）わざの伝承．明和出版，p. 525.